

フィレンツェの歴史地区 ～ルネサンスの画家たちの物語～

フィレンツェは仕事やプライベートで何度か訪れていますが、いつも時間に追われ、良くて1泊、ウフィッツィ美術館も十分には観られず、何だかもったいないような気がします。たまにはのんびり滞在したいものです。

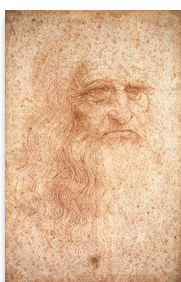
さて今回、なぜ『フィレンツェの歴史地区』に注目したかといいますと、「優れた芸術家たちの存在と彼らの残した数々の作品」が、フィレンツェという都市を世界遺産へ導いた1つの要因となったからです……私はそう思っています。

また、他の歴史都市や地区で、ここまで芸術家たちがその存在価値を示した都市は果たしてあったでしょうか。彼らの活躍が500年後の世界遺産の登録につながったのは間違いないでしょう。これは西洋美術史の観点においても特筆すべきことです。

ルネサンス時代、優れた芸術家がたくさん輩出されましたが、その中でもポッティチェリ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、彼ら4人の関係性や絵について、代表作とともに絵画技法も交え、考察していきたいと思えます。



ポッティチェリ



レオナルド・ダ・ヴィンチ



ミケランジェロ



ラファエロ

はじめに、この4人の芸術家について、おさえておきたい点が2つあります。皆様もご存知かと思いますが、それは4人の年齢差とミケランジェロだけが彫刻家としての名を掲げていたことです。

生誕年は、ポッティチェリが1445年、レオナルド・ダ・ヴィンチは1452年、ミケランジェロは1475年、ラファエロは1483年、とされています。世代で見ると、1450年前後に生まれたポッティチェリとレオナルド・ダ・ヴィンチは、ほぼ同世代。1480年前後に生まれたミケランジェロとラファエロもまた、ほぼ同世代。それぞれ約30年の差、親子ほどの年の開きがあります。今回は、年齢の近さを優先し、同世代同士で考察、比較します。

また、現在はレオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロがよくライバル視されるようになりましたが、私はそうは思いません。実際のところ、資料も少なく、どこまでお互いをライバル視していたかは謎といった方が正解でしょう。絵画と彫刻が芸術の双璧を成すものであった当時、彫刻家の第一人者としての自負が強かったミケランジェロにとって、その矛先は、レオナルド・ダ・ヴィンチではなく、“絵画そのもの”であった、と私は考えています。

さて、ポッティチェリとレオナルド・ダ・ヴィンチの関係について考察しますと、二人は同じ工房の先輩と後輩の関係にありました。古典的技法を貫こうとするポッティチェリにとって、新しい絵画技法を斬新に取り入れるレオナルド・ダ・ヴィンチの才能は、脅威だったでしょう。

注目すべき点は、レオナルド・ダ・ヴィンチは、「空間に輪郭線は存在しない」と、気がついていたことです。これは科学者目線で物事を捉えていたからに他なりません。ちなみに、その新しく取り入れた絵画技法が「スフ

マート」と呼ばれる技法です。古典的技法を重視するポッティチェリの『ヴィーナスの誕生』（1485年頃制作）には輪郭線がありますが、レオナルド・ダ・ヴィンチの『聖アンナと聖母子』（1510年頃制作）には輪郭線がありません。「空間に輪郭線は存在しない」ことは、今では油彩画教育の常識となっていますが、これに気がついたレオナルド・ダ・ヴィンチは、当時の絵画の常識を覆したのです。言わば「その後の流行を生み出した最先端のアーティスト」といっても過言ではありません。

ちょっと面白い話ですが、西洋人に人気の高い浮世絵には、はっきりとした輪郭線があります。これは西洋美術技法からすると、デフォルメ化を際立たせ、個々の対象と背景を分離させるため、絵画全体をととても不自然なものにしてしまいます。今から約150年前にヨーロッパでジャポニズムが流行しましたが、彼らは輪郭線があるのは不自然だということを承知した上で、取り入れたのです。なぜでしょうか？ 約150年前といえば、奇しくも、写実的絵画が飽きられ始め、印象派が流行し始めたのと、ちょうど同じ時期。今度はまたルネサンス期以前のように、輪郭線がある絵が新鮮に感じるようになったのです。絵画の世界にも時代の輪廻があるというわけです。

また、ポッティチェリの『ヴィーナスの誕生』と「浮世絵」には共通するものがあります。えっ？と思われるかもしれませんが、はっきりとした輪郭線、大胆に人物をデフォルメしていること、絵に立体感がないことが認められます。それらが逆に、観る者に時代を超えた不思議で新鮮な魅力を与えているのです。



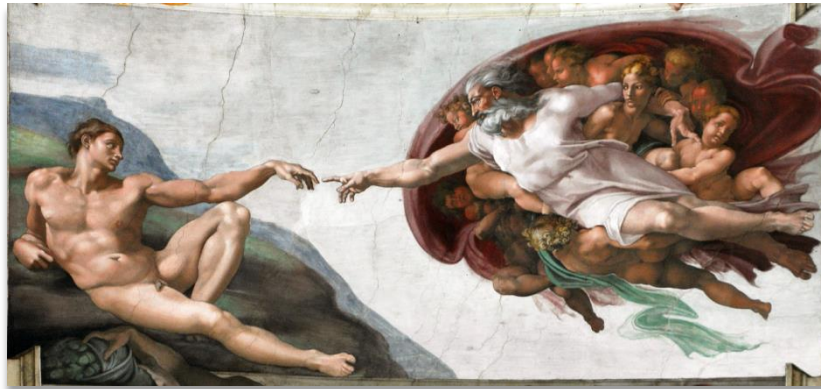
ポッティチェリの『ヴィーナスの誕生』と
レオナルド・ダ・ヴィンチの『聖アンナと聖母子』



一方、ミケランジェロとラファエロの場合はどうであったかという点、彼ら二人は、同じ場所で同じ時期に絵を描いています。作品は世界遺産『ヴァチカン市国』のヴァチカン宮殿にあります。1510年から1511年にかけて描かれたミケランジェロのシスティーナ礼拝堂天井画「アダムの創造」と、ラファエロの『アテナイの学堂』です。また、ミケランジェロは、1533年から1541年にかけて、『最後の審判』を描きました。当時ミケランジェロは30代、ラファエロはまだ20代です。

年齢ごとに画家の絵を比較してみると、技法の相違や上達の段階が明らかです。制作当時、二人ともまだまだ成長過程で円熟期を迎えていません。概して、画家の円熟期は意外と遅く、50～60代が多いとされる中、ラファエロは40代を迎えることができなかつた夭逝の画家です。つまり、ラファエロの絵は全て、“成長過程の絵”なのです。若さ、純粹さからなのか、彼の絵は、基本的に忠実で、素直な感じがします。

画家の作風は、年を経るにつれ、変化していきます。ラファエロにもし円熟期があったなら、どんな絵を描いていたのでしょうか。レオナルド・ダ・ヴィンチを越える存在になっていたかもしれません。ラファエロは、私にとって、4人の中で唯一、想像を掻き立てられる画家なのです。



ミケランジェロの「アダム」(上)と『最後の審判』(右下) ラファエロの『アテナイの学堂』(左下)



次にこの二人の絵を比較してみると、物静かで精緻な筆致のラファエロの『アテナイの学堂』に比べ、ミケランジェロの「アダム」や後年に描かれた『最後の審判』は、筋肉もりもりで少し滑らかさに欠けているように見えませんか。現実にあそこまで筋骨隆々とした人間はそうそういませんよね。少々極端な見解ですが、彫刻は立体作品、画面も色彩もなく、背景も陰影も考慮する必要はありません。しかし、立体であるがゆえに、筋肉もしっかりと表現しないと作品になりません。つまり、対象となるのは“人体そのもの”なのです。それに対して絵画は平面作品であり、人体そのものは主役であったとしても、画面全体のバランスや構図や色彩、陰影の一要素でしかありません。

目に視えない筋肉の細部まで自然と表現できてしまうミケランジェロは、さすが人体の構造を知り尽くしています。その場にモデルがいたわけではなく、実物を目の前にせずともあそこまで描ける“彫刻家”は、ミケランジェロをおいて他にはいません。

絵画と彫刻の入口が同じデッサンだとしても、制作過程は全く異なります。美大の受験予備校では必ず石膏デッサンの授業があります。彫刻学科の生徒は、描くというより掘り出すように描くので、油彩学科より彫刻学科

の生徒のデッサンの方が、色調が黒々としてきます。『すべてがわかる世界遺産大事典<下>』に「巨大な大理石から像を掘り出す」とありますが、まさにその感覚なのです。この二人の絵を比較すると、「画家らしい絵」のラファエロと「彫刻家らしい絵」のミケランジェロの特徴が、如実に現れているのが興味深いところです。

フィレンツェ・ルネサンス時代の発展は、もちろんこの4人の功績だけではありません。後世に名を残した芸術家は、優にその10倍はいます。また、メディチ家などの芸術家を保護したパトロン存在もたいへん大きい。フィレンツェは政治と芸術が見事に融和したルネサンス都市の傑作と言えるでしょう。

私が初めてフィレンツェを訪問したのは大学生の時、今から30年以上も前のことです。当時バックパッカーの一人旅で安宿に泊まったのを覚えています。とにかく走って走って観光名所をひたすら写真に収め、最後はジョットの鐘楼へ上り、街全体を眺め、これでもうお腹いっぱいでした。学生にありがちな超スピード観光でした。

しかし、これだけ歴史のある街は、見て回るだけでなく、現地在住の日本語ガイドさんから詳しく説明を聞くなど、じっくりと見学した方が絶対にいいですね。機会あれば、また訪れてみたいです。

沼田政弘